

令和3年度第2回入学者選抜制度検討協議会 議事録

日 時	令和3年度12月23日(木) 10:30~12:10
会 場	県立総合教育センター
出席者	下記の通り
概 要	<p>1 県教育委員会あいさつ</p> <p>2 資料説明</p> <p>資料4…神奈川県公立高等学校入学者選抜制度に係る課題等について ～神奈川県教育委員会事務局における検証～</p> <p>資料A…入学者選抜制度に関する検証について(検証概要)</p> <p>資料B…入学者選抜制度に係る検証及び改善に向けた検討に当たっての基本的な視点</p> <p>資料C…入学者選抜制度の現状と課題について</p> <p>資料D…調査書(第11号様式)令和3年度卒業(見込)者用</p> <p>3 協議</p>
協議概要	<p>(○委員 ●県教育委員会)</p> <p>(1) 検証・検討の視点について</p> <p>(2) 入学者選抜制度の現状と課題について</p> <p>(3) 入学者選抜制度の改善の方向性について</p> <p>○(池田会長) 本日は大きく3つに分けて議論していただきたい。</p> <p>まず、「入学者選抜制度に係る検証及び改善に向けた検討に当たっての基本的な視点」、「入学者選抜制度の現状と課題について」の2点である。この2点については事前に林副会長と事務局とで何度か打合せをさせていただいた。そして、この2つを受けて、本日は皆さんから具体的な改善の方向について、様々な意見をいただきたい。</p> <p>○(池田会長) 資料Bについて説明する。(1)は理念的なこと、(2)は県と3市、中央教育審議会答申について、(3)は新学習指導要領について、まとめている。(1)は生徒の特性・長所を生かすような選抜制度であること、また、生徒自身が自分で学校を選択していくというような基本理念で検証をしていく必要があると書かれている。(2)はこれまでの県と3市の方向性、令和3年1月に出された中央教育審議会答申の『令和の日本型学校教育』について書かれている。生徒の可能性及び能力を最大限に伸長するという方向で、スクール・ミッションの再定義、スクール・ポリシーの策定、こういったところが大きなテーマになっている。スクール・ポリシーに基づく教育活動を高校では進めていく流れになっている。(3)の新学習指導要領では、資質・能力の3つの柱をどのようにバランスよく育成していくかがテーマになっている。やはり「主体的に学習に取り組む態度」をどのように評価していくかが、中学校等で話題になり議論となっているようである。</p> <p>○(池田会長) 資料Cは、3本柱に則って評価をしていくということが書かれている。特に「主体的に学習に取り組む態度」が評価に表れてくる。この辺り、かなり面接とも関わってくるところであり、皆さんにもご意見をいただきたい。</p>

以上のように基本的な視点をご説明した。この点についていかがか。

上條委員、評価の話も出てきて、中学校の現状もあるかと思うが、いかがか。

○（上條委員）基本的な視点ということで、3点にまとめていただいて、それでよいと思う。評価についても、今年度から全面実施ということで観点が4観点から3観点に変わり、実際に評価をしたところであるが、それまでに移行期間もあり、それぞれの教科で様々検討し、検証を重ねて今年度実施に向けて準備をしてきた。それぞれの教員が苦勞をして、変わった点に対してどのようなところに違いが出てくるのか様々な視点を持って対応していくということが大切だと思う。

やはり、変わったばかりなので制度については時間をかけて慣れていくことはあると思うが、中学校としてはそのような準備をしながら評価をしているところである。

○（池田会長）今後の高校教育の在り方や方針について、各市のこれまでの流れがあると思うが、横浜市の石川委員はその辺りいかがか。

○（石川委員）横浜市では、こちらにある第3期横浜市教育振興基本計画、現在、第4期の策定を進めている。学習指導要領改訂のタイミングや横浜市全体の周期計画もあるため、第4期の策定作業に入ったところであるが、高校の教育については3期と基本的には変わらない方向性である。資料Bに書かれている「一人ひとりの特性・長所」という言葉は、どう使うかだが、一人ひとりを大切にしたいということは高校では一つ言えることであるし、現在これからスクール・ミッションの策定ということで高校は高校での作業があるが、市全体としてはここに書かれている内容と齟齬がない方向で教育振興計画の策定を進めている。

○（池田会長）川崎市の大島委員はいかがか。

○（大島委員）川崎市も今年度、次年度から4年間の市の総合計画のローリングの年となっていて、それに合わせて教育委員会でも川崎教育プランの次期の計画の策定作業中である。川崎市の市立高等学校改革推進計画第2次計画については、若干計画期間がずれていたのが、今2次計画の期間中だが、令和2年度から一応来年度から始まる市の総合計画と川崎教育プランと、後ろは合わせるという形で今現在すでに動いている2次計画に沿って高校改革等を進めていく予定である。内容については、こちらに書かれてある通り魅力あふれる普通科教育の推進等を進めながら地域の課題等や区役所等と連携した学校独自の取組等を試行錯誤しながら進めているところである。

○（池田会長）先ほどあった、高校の方でスクール・ポリシーについて様々ご苦勞されていると思うが井坂委員、どのような感じなのだろうか。

○（井坂委員）県立高校では今まさに先ほど、お話があった通り、スクール・ポリシーの前にスクール・ミッションの再定義ということについて、これは設置者が決めることになっているため県教育委員会とやりとりをしながら取り組んできた。それを踏まえて今回はスクール・ポリシーを策定するというので、3つのポリシーの「カリキュラム・ポリシー」と「アドミッション・ポリシー」、「グラデュエーション・ポリシー」がある。その中で直接に入学者選抜に関わるのはアドミッション・ポリシーであり、スクール・ミッションの再定義については、県教育委員会が決めていく。それを踏まえたうえで学校

では、具体的にどういう教育をするのかを来年の3月にスクール・ポリシーとして公表する。決めると毎年変えるものでもないため、しっかりと議論して1月に県教育委員会に提出したいと思う。入口のところでどういう生徒に入ってほしいかをどこまで書くのかは、県教育委員会と相談していきたい。どうしても具体的な数値は出せないため、言葉での説明をより分かりやすくどのように表現していけばよいか検討していきたい。

○（池田会長）いつまでに提出するのか。

○（井坂委員）1月14日に提出ということになっている。どの学校も根幹はできていると思うが、表現の仕方や言葉の使い方に苦戦していると思う。

○（池田会長）そういった流れの中で、鎌上委員はPTAの立場から今の話をどう考えるか。

○（鎌上委員）まさに私は今、中学3年生の受検生の息子がおり、学校からも新しい学習指導要領になるという説明があったが、やはり生徒としては自分の成績に直接関わることで気になって落ち着かない様子が見られた。あとは、評価の点で具体的に学習に取り組むという点では、授業の在り方も徐々に変わってきているように感じる。その辺りの評価は意味合いが変わってくるのかと思うが、やはり、授業中、積極的に発言する生徒がいれば、性格上発言が苦手な生徒もいて、そのような生徒はいい評価がもらえないため、しっかりと授業に取り組んでいる姿勢も汲んでいただければという声もある。

○（池田会長）個性ということか。

○（鎌上委員）そう、個性を見ていただければ、という声も保護者からはある。

○（池田会長）組合の方から、岩崎委員いかがか。

○（岩崎委員）先ほど井坂委員からお話があったが、各学校スクール・ポリシーの策定に向けて大詰めの段階であると思う。スクール・ミッションは県教育委員会からの再定義ということだが、スクール・ポリシーは各学校で策定ということで、アドミッション・ポリシーとこれから議論される入学者選抜制度の改善の方向性については密接なつながりがあるため、これまでの様々な資料でまとめたいただいた理念を踏まえつつ、具体的に落とし込んでいければよいが、難しさはあると思う。

○（池田会長）基本的な視点というのは、これから入学者選抜について協議していくが、やはり一番大前提となる、我々がどちらを向いて検討していくのかということが基本になってくると思う。今の話に出てきたような子どもの特性や長所を大切にするという方向で、高校はスクール・ポリシーを打ち立ててやっていく、こういう流れの中での入学者選抜制度の改善をやっていきたいということを、確認させていただいた。

続いて資料Bに関して他に意見はあるか。よろしいか。

○（池田会長）次に、今までの基本的な視点を基に、入学者選抜制度の現状と課題について、本協議会としての整理を行いたいと思う。資料Cをご覧いただきたい。資料Cの「入学者選抜制度の現状と課題について」は3ページほどあり字数も多いため、3分くらい時間をとるので確認してほしい。

—（各自資料を確認）—

○（池田会長）それでは、順番に見ていきたいと思う。まず、1ページ目はこれまでの現状と課題についてであるが、1ページ目を読まれて何か意見はあるか。

では2ページ、3ページを順番に話していきたいと思う。これを読まれて、なるほどと思った点や加筆、修正した方がよい点について意見はあるか。

まずは、（1）面接検査についていかがか。

○（島崎委員）面接の意義について、少しこれと離れたところからスタートさせてもらって恐縮だが、中学校現場ではこのくらいの時期になると、校長室で面接の練習をしたりということを経続的に行っている。学習指導要領の中で直接、面接が位置付けられているわけではないが、子ども達の学びの中で面接の練習や面接についての態度を学ぶいい機会であると考え、その成果が試されるのが面接であると認識している。また、現場の感覚からいうと面接では差が付かないということを含めて、行うことに意味があるのだろうかという意見もあると思うが、教育的な意義については非常に高いと思っている。そのことを前提の上で、1つ目の、「志望に係る意思を聞き取る必要」があるのかということ。意思を聞き取るだけなのかということでは疑問である。2つ目の、「面接ではなく別の方法で見取ることも可能」と書かれているが、別の方法とは具体としてどのような方法が考えられるのか。少し具体性に乏しい記載と感ずるがいかがだろうか。

○（池田会長）1つ目の意思を聞き取ることへのプラスアルファについて、島崎委員、もう少し話していただければと思う。

○（島崎委員）先ほどのアドミッション・ポリシーと深く関わってくることだと思うが、学習指導要領のことも踏まえると、今後、現場でもよく議論することだが、今の中学生が大人になる時に今の産業構造がそのままあることはないという話の中で、やはり学び続ける力の必要性が求められているということ、やはり高校だけではなく、高校を含めて将来のビジョンについて学び続けるということの幅を広げていくことが必要であるという気がした。

○（池田会長）生涯教育を考えるということであろうか。2点目、面接の別の方法ということで、面接は面接でないで見られないことがあるという意見も確かだが、この辺りに関して林副会長はいかがか。

○（林副会長）私も実際面接をしている立場であるが、我々は大学入試で30分かそれ以上面接をする。その中でも学び続けることへの意欲や積極性を聞きたいと思ひ質問するが、なかなか高校3年生でも大学での学びがこの受験生にとってどこまで合うのかということを知りえることは難しい。特に先ほどの話にもあったが自分の意思を言葉で表現しきれないタイプの生徒だとそれを引き出すのに時間がかかってしまうため、客観的に評価することが難しいので、言いたいことは分かるが、なかなか面接では難しいと感じる。他にどのような方法が適切なのかと言われると難しいところではある。

それと、先ほど別の方法でという部分は、私は逆に、むしろ現状の10分の面接時間の中で、どこまで自身の意欲を見取れるのかということ、どうしても塾や、大学だと予備校などで対策を取られてしまうので、結局同じことの繰り返しとなり、その方が島崎委員がおっしゃっていたような懸念になるのではないかと思います。別の方法としては、他

県では、作文を書かせたりとか、自己表現というタイトルで文章を書かせたりと様々な方法をとっているところもある。私は、今回、中学校の調査書が変更となることは非常に大きいことであると思う。これはアドミッション・ポリシーとの兼ね合いで、何を見たいのかが関わってくると思う。それと、これからの時代は一概に面接でなくてもよいのではないかと思う。ただ、冒頭に申し上げた教育的な意義としての面接の実施については否定できないし、行っていくべきであると思う。

○（池田会長）もう少し広く意見を伺おうと思う。廣間委員はいかがか。

お子さんによっては、意欲はあるのだがそういったことを伝えるのが難しいという話もあったがそういった点はどうか。

○（廣間委員）私は、子どもが3人高校受検を経験してきて、面接に関しては先ほど島崎委員がおっしゃっていたことを前回の会議からずっと考えてきたが、面接を受けるまでの子ども達が自分を見つめ直す時間として非常に大切な時間だったと感じている。それは、大学受験や就職活動で面接は避けて通れないものなので、これを中学3年生という時期に経験させてもらうのは、非常に貴重であると感じている。また、別の方法を考えてみた場合、自分を見つめる時間というのが非常に大切だと感じていて、自分を見つめ直してどうするかということや文章にまとめるという形がいいと思う。例えば作文であれば、10分で対面して自らの言葉で表現できない子どもも紙でなら書いて見せることができると思うため、これも非常に有効と考える。

○（池田会長）意欲の表し方として、口頭で行うのも一つの方法であるし、文章で行うというのも一つだと思う。それこそ個に応じたということもあるかもしれない。もう少しお聞きしたい。上條委員、いかがか。

○（上條委員）今、まさに、私の学校でも面接の練習をしており、毎日5～10人くらい時間を区切ってほとんどすべての生徒と面接をしている。生徒は、当然、私と面接をしているだけでなく学年の職員ともするが、ここで子ども達が語っている内容というのは、やはり自分の将来の夢や、目標、希望等、そういうものを持っていて、それに近づくために高校でこういうことを学びたい、こういう活動をしたいという話をしてくれる。その背景にあるのは、個々に応じて思いや願いだったり、様々なものが含まれているので、先ほどから話題になっているように、教育的な意義は大きく、自分がこれから学びたい学校の先生に伝える場があるというのは、子ども達にとってとても大切な時間である。また、それを準備して、学力検査だけではなく、自分の思い、自分の考えを伝えて、総合的に評価をしてもらうというのは、子ども達にとっては意義がある。その伝え方として、面接というのも当然考えられるし、先ほどご意見があった作文というのものもあるだろうし、そこは様々な表現の仕方があるが、学力検査だけではない所で伝えていけるというのは、非常に有効かと思う。

あと、子ども達を見ていて、やはり様々な思いがあり、多様化してきていることも実際にあり、様々な子ども達の考えで高校進学を行っている。昔のように、レベルの高い高校に行こうという考えではなく、やはり自分の意思をもって、この高校はこういう特色があるから、私は希望があるのでここで学びたい、必ずこのような選択の仕方をしてい

るように感じる。我々の時代と比べると、よい偏差値の学校に少しでも行きたいという選び方は、今、子ども達はしていないように思う。

○（池田会長）多様化ということだが、今の件は、例えば特色検査がどのような形になるか、あるいは、主体的な学習に取り組む態度を学校がどう評価するか、その辺りもかなり関わってくると思うが、この辺りは何かご意見あるか。石川委員、いかがか。

○（石川委員）今、ここまでお話を伺っていることはどれも正論だと思うし、面接が中学生の学習活動としてとても大切だということは、よく分かる。広い意味でのキャリア教育、自分の生き方を考えていくという教育活動として意義がある。余談だが、横浜では日本語支援施設があり、日本語支援の必要なお子さんが入学者選抜に臨むにあたって面接の練習を、指導主事や支援員など、様々な言葉が堪能な方々が行っており、それはそれで教育活動として価値があり、その子どものことを再発見ができたりもする。一方、入学者選抜制度として考えた時に、10分間の面接時間でどのように選抜するかということについては、おそらく説明するものをもっと必要だと思うし、なかなか難しいと考える。限られた時間の中で、どの中学生も皆見ていくというのは難しいと思う。どの中学生も学校で面接の練習をしているのとは、選抜方法として考えた時にまた違った話になる。先ほどお話にあったが、アドミッション・ポリシーの関係で、それに基づいて各高等学校の視点や基準について設定して、面接を各学校の選択に任せるという方法でどうかと思う。生徒への負担もそうだが、見る視点というのは、各学校のスクール・ポリシーの中で考えていくべきものではないだろうか。その中で、例えば専門学科等、面接が必要だと考えているところについては、視点を明確にした上で実施することは当然あると思う。灰色な答えになるが、アドミッション・ポリシーに基づいて、各学校が考えていくということはどうだろうか。

○（池田会長）ちょうど「・」の3つ目、このあと議論していく改善の方法等のところまでご意見をいただいた。これはまた後のところで石川委員にご意見いただきたいと思う。今、大きく面接で上の「・」の3つはかなり議論になったと思う。それ以外に何かあるか。

○（井坂委員）今、現実に面接を実施している立場から、感想を申し上げる。全くおっしゃる通りで、教育的に考えればキャリア教育の面でも自分を見つめ、自分の行きたい学校、学びたいということをしっかり語ることができる生徒に来てほしいという気持ちは持っている。

一方で、その面接についての評価をしなくてはならない。最初にご指摘した中央教育審議会答申においては、高等学校には、様々な背景を持つ生徒が在籍しているとしている。また、その上で、各高校はさらに生徒の多様な能力、適性、興味、関心に応じた学びを実現する必要があるから、これからは学校によって明確なアドミッション・ポリシーを掲げ、こういう生徒に来てほしいと明確にする必要がある。大きな話になってしまうが、入学者選抜制度の改善において資料Cの1ページにもあったが、複雑で分かりにくいという指摘を変えなくてははいけない。より分かりやすい形の入学者選抜制度にする。また、やはり長期化を避けたい。中学生にとっても高校生にとっても、この2つが大切

であり、あとはマッチングである。我々も大学に生徒を送り出すとき、やはりマッチングを考える。大きなスキームとしては、より分かりやすいことと、長期化を避けることと、それからマッチングだろう。そうすれば、中央教育審議会答申にある多様な能力、適性、興味、関心に応じた学びを実現できる。その意味で、私自身も高校3年生に面接練習をしているが、実際に30分、40分の面接で生徒を見取ることができるかという、なかなか難しいものがある。作文という話もあったが、実際に入学者選抜として実施した場合には評価があるので、これも分量的にも評価する上でも、なかなか難しい。もちろん、学校によっては、作文を課すことで生徒の力を把握したいという学校はそういうスタンスで取り組むことは可能ではあると思う。一番大きいのは、学力検査はすべて、受検生に結果について数字を示しているが、面接については評価の観点に基づき評価しており、本当に最後に点数が並んだ場合、10分間の面接で差をつけるか本当に迷う。ペーパー試験で行えば差が付くのは誰でも分かるが、本当に読み切れるのか。学校によっては専門学科等様々あるが、私どもは普通科なので、実際にはそれほど差があるものではなく、非常に難しい。学校や学科によって、面接が必要なところはしっかり検討を行うべきである。少し長くなったが、私にとっては目の前の話なのでつい、時間を取ってしまった。

○（池田会長）岩崎委員、どうぞ。

○（岩崎委員）まとめていただいた現状と課題は簡潔で、現状と課題をしっかりと把握されていると思った。先ほど島崎委員から、別の方法でということについてのご質問があったと思うが、資料4の3ページ、【意見を踏まえた整理】の3つ目の○に、『学びに向かう力』については、学習評価の観点、『主体的に学習に取り組む態度』で見取ることが可能と考えられ、と記載があり、私もそのように考えている。面接の意義は否定するものではないので、学校に応じてというところではあるかと思う。現場の立場から、実際面の話も若干させていただくが、面接で聞くことのできる項目は本当に限られている。それについて、評価基準を設定するために、校内で度重なる研修をしている。また、当日だが、様々な受検生がいる。口数が少ない、あがり症という受検生に配慮しなければならぬとなると、どのように評価をすればよいか悩ましい。受検生についても、吃音や場面緘黙の受検生にとってかなり負担や負荷があるかと思う。特に、面接の時間が午後や2日目になる場合は、長時間緊張状態を強いられる。高校側にすれば、時間差で行うので、当日、遅刻・欠席の生徒が出るか出ないかという緊張を強いられる。総合的に学校が判断して、主体的に選択できる形が望ましいと思う。

○（池田会長）現状と課題の議論で、次の方向も出てくるので、この辺もお話しいただければと思う。

今のお話、要点を私なりに精査させていただくと、一つは、教育的意義が大きい、廣間委員がおっしゃったように、まず、自分を見つめる機会、これがやはり大きい。自分を見つける機会は、中学校でもしっかり進めていただきたい。また、面接をすると、教職員の方にも再発見があるという石川委員のお話もあった。そういった意味での、教職員側の理解が深まる。

もう一つは、意欲の評価といったときに、個によって様々な表現の仕方がある。口頭で

自分を表現する力のある子どももいるし、力のない子どもは作文とするという方向もあり、このようなところに多様性がでてくるのではないかというお話があった。ただ、一方でこういった教育的意義に関して、やはり10分間でそれを面接で見取るというのは、かなり評価するのが難しい。さらに言えば、難しいのであれば視点を明確にしてやるべきだというお話も出てきた。また、岩崎委員からのお話では、主体的に学習に取り組む態度を中学校で評価し調査書に載せて提出しているのも、これによっても評価ができるという視点もあるだろうということであった。大きな改善の方向で何人かの委員に議論いただいた中に、やはりアドミッション・ポリシーが出てきた。子どもが将来に向けて進路を選択していく、自分で道を切り開いていこうとする、それに応じて高等学校ごとにアドミッション・ポリシーがあり、特徴を出している。その特徴の中で、面接をしっかりと行って見取るという学校は面接を行えばよいし、作文をしっかりと行って見取るところは作文を行えばよいし、あるいは主体的に取り組む態度の評価を重んじるのであればその辺りを見取るということで、かなり高校側のスクール・ポリシーに基づくアドミッション・ポリシーに任せて実施していくのがよいのではないかという議論が複数出た。かなり面接については、改善の方向が出ていた。

まだ、追加があればどうぞ。

○（林副会長）気になる点としては、在籍している生徒、高校生の授業日数が、最大7日、あるいは定時制を持っていると、もっと長く授業が行えない可能性があるという点である。通信制のみの学校は1校しかないのも、そう考えると、高校は誰のためにあるのかということと高校生のためにあるので、その高校生が入学選抜によって、自分達の授業、つまり学力を上げるチャンスを失うことになるという神奈川県の高次入学選抜日程の長さは、高等教育の立場からすると、まずいのではないかと。今、これから大学入試がいろいろ様変わりしてきて、総合型選抜が早稲田で6割と入試が早くなっているときに、神奈川県の高次生が2月に休みが多くなるのは、私の立場からすると少し気になる。そういう観点からしても入学選抜の在り方を考える必要があると思う。

○（池田会長）（2）で実施期間の現状に関わる話をいただいたが、もう少しこの実施期間について議論を深めていきたいと思う。島崎委員、いかがか。

○（島崎委員）私も2～3、他県の状況を含めて調べてみたが、神奈川県の高次入学選抜は比較的早い段階から入っているという特徴がある。本来、在校生の学習保障を考えると、卒業式の問題を別にしたとしても、入学選抜期間は後ろに持っていった方がよい。全国的には後ろに持っていった傾向が見てとれる。まずはその問題が一つあると思う。林副会長のおっしゃる2月の学習保障を考えると短期であればあるほど望ましいと思うし、中学校の学習を考えれば入学選抜自体が遅くなった方が中学生の学習時間は確保できるという傾向になる。

もろもろの課題の中で今学習時間が減ってきているのなら、その辺りの課題を整理する必要はあると思う。

○（林副会長）なぜ神奈川県はこんなに早いのか。

●（岡野教育監）様々な要因はあるが、例えば中学校長会議での意見だと、卒業式までに

大方の進路が決まった形で卒業式を迎えたいということである。卒業式までで大体の入学者選抜は合格発表まで含めて終わっておいた方がよいだろうと、我々もその通りだろうと思う。もう一つは、私立高校の入学者選抜の日程がだいたい2月の始めにあり、そこを被らないようにすると、後ろは決まっています、前も決まっているためもうこの期間でやるしかないというような状況になっている。他県の状況も掴んでいるが、遅いところは地方が多く、大都市圏は少し早い。それは受検生の数の問題であり、やはり、最終的には神奈川県で昔から言われている「15の春を泣かせるな」というテーマで行っており、少なくとも誰もどこも行き場がないような状況にならないように重層的に入学者選抜を行う。そうすると少し早い段階から始めて、理想を言えば最後の一人が決まるまで様々な、今でいえば共通選抜の後に共通選抜の二次募集、その後に定通分割選抜を実施、そして、最後に定通分割二次募集というこの重層的な流れの中で全員どこかに進路が決まるようにしたいというのもあり、期間がかなり限定しているのと、早めに始めないと年に6万人位の入学者選抜を実施しているためその人数をさばききれない。一方で重層的に行っているため長期間になってしまうということで、なかなか日程を大きくずらすということは現状、非常に厳しいということである。

○（池田会長）学習保障の観点と、セーフティーネットの視点ということであるか。

○（岩崎委員）長期化に関しての課題については、前回も申し上げたが、3月下旬になると新年度に向けての準備と錯綜してしまうため、生徒・保護者もなかなか手続き等を取りづらい状況もある。ここにまとめていただいたような定時制・通信制の日程も含めて短縮して、最後のところは余裕があつてよい。具体になってしまうが、現状、共通選抜の合格発表から定通分割選抜の出願まで中1日しかない。それで、共通選抜の二次募集と定通分割選抜が両方出願できるということで、連日になる。実際は、定時制に出願した生徒は、全日制の二次募集の方にかかなり移動するという状況である。最後の定通分割選抜の二次募集の合格発表が今年度の日程でいくと3月29日ということで、教職員にとっても非常に厳しい。様々なメニューを用意して今の形になっているが、スリム化を図れるところはこの際、図っていければと思う。

○（池田会長）保護者の方からの意見はいかがか。

○（廣間委員）子ども達は、2週間学校が休みで喜ぶが、PTAの方は2月は次年度の予算等で学校に行きたいのに、入学者選抜期間は学校に立ち入ることができないので、そういうところでも活動が狭められてしまうというところがあり、入学者選抜期間が短くならないかと思う。また、入学者選抜が終わってから合格発表までの期間がとても長いわりには、そのあとの手続きの期間が非常に短くて、保護者はとてもあたふたしてしまうという状況である。

○（鎌上委員）今おっしゃったように手続きも慌ただしいし、入学者選抜期間中は保護者もなるべく中学校に立ち入らないようにしているため、今、岡野教育監からの理由をお伺いしたところ、仕方がないこととは思うが、入学者選抜期間は天気が心配な時期の2月で、大雪が降ったりということもあるため、難しいところではあるが、できるだけ短くできたらと思う。

○（池田教授）大島委員、いかがか。

○（大島委員）この会議の前に自分の部署の中でも指導主事と協議したが、やはり川崎市としてもこの実施期間が長いことについては課題としている。具体的話になるが、定通分割選抜の二次募集の部分、そこが、やはり先ほど県教育委員会からのご説明の中であったが、重層的な機会の確保は重要な一方、定通分割選抜の二次募集が、卒業式の後になってしまうという課題と、100%ではないにしても、現役中学3年生以外の生徒への役割も一部果たしているような現実もあるため、全体の期間とどこまでそういった機会を確保してあげるか、そこの兼ね合いをやはり論議した上で少しスリム化を図れるかというと思う。

○（池田会長）石川委員、いかがか。

○（石川委員）ほぼ同じだが、進学を希望する生徒が行き場がなくなることを何とかしたいというのが、全中学校現場の願いであるということなので、そこについての配慮は今後も必要である。それを前提として、ただ期間が長くなればなるほど、生徒の精神的な負担が多いということも当然あるので、もし検討するとしても、定通分割選抜の方針のところなのだと思う。中学校の学校生活に与える影響がかなり大きいということについては、事実上3学期がなくなってしまう。セーフティーネットの兼ね合いなので、それがいけないというわけではもちろんないが、ただ、中学生にとっての3学期を、卒業式前後の大切な学校生活の期間としてどう考えるかということも、進路を決めることが第一優先であることを踏まえ、中学校現場から見たら、中学校生活を充実させて終わらせたい、卒業させたいという願いも当然あるだろうから、そういうところとの兼ね合いだろうか。期間を短くすること、スリム化していくことは、大事なのではないかと思います。

○（池田委員）中学校生活の充実という話であるが、上條委員、いかがか。

○（上條委員）最も悩むところである。確証はないので、あまり言えないが、今のセーフティーネットについての私の印象は、定通分割選抜の二次募集について、現役の中学校3年生で、そこまで残ってしまう生徒は、近年あまりいないと感じる。

●（岡野教育監）今のお話だが、たとえば共通選抜がスタートして、中学校卒業生が、概ね6万5千人位というイメージで行くと、定通分割選抜の二次募集受検者は10数名である。一桁というのはまだないが、全員が新卒者ではないにしても、規模的には、そのくらいの数の受検生しかいない。

○（池田委員）セーフティーネットの必要性が重要でありつつ、定通分割選抜の受検生はかなり少ないということである。高校側としては負担ということを考えてどうか。

○（井坂委員）皆さんのおっしゃる通り、最初に申し上げたが、長期化をなるべく避けたい。実質上、3学期の高校は、3月に入ると学年末試験に入ってしまうので、1月は正月があり、実際3学期というのは、教職員にとって、学習面においても、学年末の生徒支援などに取り組むにしても、十分な時間があるかといえば、現状では時間的に不足していると言わざるを得ない。資料に何日間というのがあるが、これは当然、入学者選抜前日は授業を2時間で終わりにして生徒による清掃後帰宅させている。結局会場を作るのは、生徒の力を借りないと、当然準備ができないが、そんな意味で実質的な入学者選抜期間

はプラスになる。ともかく一般論になるが、生徒の学習保障というか、ご案内のとおり2月の第3週がまるっきりなくなってしまい、その間我々も生徒の学びを保障する意味でも、どうしても宿題を課すことになってしまう。このことを考えると、1日でも短ければありがたい。

○（池田委員）学習保障の視点から短縮化、実施期間について、他に何かあるか。

皆さんのお話をお聞きすると、大きな課題としては、1つは学習保障の視点からの課題、もう1つは、精神的負担、それは生徒、保護者、中学校側と高校側からも負担であるということが大きな課題として挙げた。ただ、忘れてはならないのはセーフティーネットである。生徒の居場所がなくなるようなことがないよう、この辺りを十分配慮しながら、現状である定通分割選抜の二次募集の受検生が数十名とかなり少ない状況なので、これを含めてどう改善していくか、これがテーマになるかなと思う。

本日は課題の明確化と改善の方向性を同時に進めさせていただいた。大きく（1）面接、（2）実施期間の現状と課題について、何か付け加えることはないか。林副会長、いかがか。

○（林副会長）特にない。実際の現場の声も聞くことができた。

○（池田会長）（1）、（2）がメインだが、（3）その他の課題については、いかがか。

○（島崎委員）自分の認識と高校での経験の中でということだが、（1）、（2）、（3）というのが、全体的なバランスとすれば、こういう話になるのかと思うが、ただ、入学者選抜に対して中学校では私立高校と公立高校の併願を勧めているが、私立高校について様々な補助金等によって、学費の問題は一見クリアされているように思う。最近クラスに1人くらい、「併願しても私立高校に行くつもりはありません」と、「公立高校に落ちたら次の道を考えます」ということで、やむなくその選択をせざるを得ないという家庭というのもしやはある。具体的には、保護者と話をしている何が出てくるかということ、前回申し上げたが、「学校まで通う交通費については、払うことができないので諦めます、公立高校に落ちたら、私立高校には行きません」というので、それでも併願を進めるのかということも含めて、中学校の進路指導は非常に悩ましいということがある。公立高校が不合格なら私立高校に入学するというのは、一般的に大きな傾向としてはそうであろうが、各学校クラスに1人私立高校に行けないということを考えると、集めると数字には出てこないが、一定のボリュームを持つ結果があるのだということについては、認識していただければと思う。

○（池田会長）大きな傾向に対して、少数を見過ごしてはいけないということである。課題の1つとして、我々が認識すべきことだと思う。

コロナ等への対応については、皆さんいかがか。

○（島崎委員）前回でも申し上げたが、入学者選抜当日に迷ってしまったという受検生がいた。今までは、学校説明会に行かなくても、出願手続きのときには、受検校に行っていた。願書等の郵送は全く問題ないが、「受検する学校だから、1回くらい見ておきなよ」というのはそうなのだが、入学者選抜当日より前の時に、学校を見ておける機会が、任意ではなくて保障される場面があってもよいのかなと思う。

- （池田会長）下見は迷わなかったが、当日迷ってしまったのか。
- （島崎委員）下見にも行っていない。
- （池田会長）この辺どうなのか、中学校で下見の指導はどの程度しているのか。
- （上條委員）必ず下見に行くよう指導している学校と、そうでない学校とあるが、やはり今お話があったように、自分が行こうと思う学校なのだから、事前に見ておいて欲しい。今までだと、体育祭や文化祭という行事を見に行ったり、あるいは出願の時に行っていた。出願時には必ず受検校に行ったがそういう機会が無く、受検校への経路が分からなかったという受検生がいたというのは、やはり中学校の指導もあると思う。
- （宮村支援部長）基本的には、中学校の任意ということではないだろうか。仕組みが変わって迷子がでることも考えられるということで、指導をしていただいて欲しい。任意ではないやり方で、受検校に行く機会を保障するというのは中々考えにくい。
- （池田会長）保護者としてはどうか？
- （鎌上委員）クラスでは先生から、昨年はコロナ禍で一度も見に行かないで受検した子が多かったという話があった。それはもう仕方がなくて、コロナ禍で説明会もほとんどなかった。機会が無い中で、「できれば行った方がよい」と保護者会の話の中であった。説明会も、昨年度の保護者は申込み手続きをしても予約がすぐに一杯になるということもあり、今年度はそういう話を受けて、受付開始になったら、すぐに web 予約してなくては、という気持ちもあったりして、私も仕事の合間に時間が過ぎてしまったということもあった。
- 息子のクラスでは、帰りのホームルームが長引いて、「予約を4時にしなくてはならないけどどうしよう」と言っていた生徒もいたようなので、各高校で web で動画を公開してくださったりしているいろいろ見られるが、当日道が分からないということもあるし、考え方はそれぞれだと思うが、やはり足を運ぶ機会は大事だと思う。
- （池田会長）このあたり、指導がやはり大切になってくるということで、中学校側でも、親の方でも指導をしていく。これもコロナの変化の中で起きてきたことであるから、慣れてくるに従い、下見に行くのはもう当たり前だという話に変わってくると思う。
- 全体を通して、他に追加、話をしておきたいことはあるか。
- （岩崎委員）その他の課題には上がっていないが、第1回で発言させていただいた特色検査についてだが、学力向上進学重点校5校とエントリー校、全部で18校合同で行われているものがある。共通問題、選択問題、マークシート導入、と改善は図られているところだが、それ以外の学校と同じ日程の中で行われているということで、厳しい状況があると思っている。受検生にとって、どういう負担になっているのかと、学力検査を受けている受検生が再度検査を受けるということで、中学生の受検生にとって準備段階から過度な重圧になっているのではないかと思う。また、実施している高校側としては、積極的な意義をもって活用している学校ももちろんあるが、エントリー校になれば自動的に実施という仕組みなので、その必要性について吟味されているのかということについて、検証が必要ではないかと思っている。事務局での検証がもしあれば、伺いたい。
- （林副会長）今、岩崎委員がおっしゃられた特色検査は、確かにもう1日程、別日程と

してあるわけだが、これも先ほどお話のあった面接とある種同じようなことで、今までは学力向上進学重点校等ということで、県から18校全校行うことと指示があったかもしれないが、これからはそれぞれの進学校といわれる学校においても、まさにアドミッション・ポリシーでどういう生徒をとりたいかを示すことで、特色検査も使い方とか在り方とかが変わってくるのではないかと思う。文部科学省からの、スクール・ポリシーの方向性という答申の中でも、ある意味大学入学共通テスト以外にも、それぞれ学校のアドミッション・ポリシーに応じた選抜問題の在り方も考えていくべきだという議論もあるくらいなので、今の特色検査が、どういう問題でどう構成されているのかは私はあまり詳しくないが、少なくとも選ぶ余地があってもいいのではないだろうか。記述問題が豊富にあったり、もしくは、学校独自で作ってもよいという余地があれば、教職員の負荷は増えるが、そこも含めてアドミッション・ポリシーの中で考えるべきことではないだろうか。

○(池田会長) 特色検査を、もう少しアドミッション・ポリシーに関連付けて柔軟に扱うというご指摘だった。

他にあるか。

○(井坂委員) 特色ではないが、諸問題の課題についての②の部分で、私立高校に志願する生徒の増加と併せて、公立高校の一部の学校では志願者が多く集まる。結果的に、不合格の生徒は、私立高校に行くわけである。最初にご説明もあったように、県立高校では、県立高校改革もあるし、横浜市、川崎市でも様々なことがあると思うが、神奈川県公立高校として倍率が高いところを受検して不合格になった生徒は、結局私立高校に行ってしまうという現実の問題として、入学者選抜制度を検討する際にも、まずは、公立高校としてどうあったら良いのかを考えるべきである。本校はおかげさまで一定程度の倍率が出ているが、残念ながら不合格の生徒は皆私立高校へ行っていて、それはそれでその生徒が選んだので良いのだが、あまり多いと公立高校としてどうなのだろうかという違和感がある。

なので、学校がアドミッション・ポリシーとしてどう入学者選抜について考えていくのか、なかなか一つの学校として考えることは出来ても、公立高校全体像として考えた場合、答えはないであろうが、難しい問題だと考えている。

○(池田会長) 他はよいか。時間も終わりに近づいてきたが。

多方面から様々なご意見をいただいた。簡単に今日を振り返ってみると、一つは、基本的に生徒が自分の将来を見つめて、自分で未来を切り拓いていく、そういうものとして、やはり入学者選抜を考えていくということが大きな方針としてある。そのような意味で入学者選抜制度を考える上で、当然教育であるということを忘れないで、ご指摘にあるように自分を振り返る機会を持たせるという指導は常に行っていきたいという話があった。一方で、入学者選抜といったときに10分間の面接の中でどこまで生徒を見取れるのかという点から、大きな方向として、やはりアドミッション・ポリシーに基づく入学者選抜制度の改善が大切であるという大きな指摘があった。そのような意味では、意欲の評価の仕方としては、面接によるものも然りだが、作文、あるいは主体的に学習に

	<p>取り組む態度の評価、このようなものを活用しながら見ていく。その中で、特色検査の在り方自体も、面接を含めるとこのようなことも柔軟に考えていく可能性もあるのではないかというご指摘もいただいた。</p> <p>もう一方の方向としては、実施期間である。これについて大きな課題としては、中学生の学習保障である。これは高校側からも出てくる課題であるが、しっかりと学習を保障するということが大きな課題として一つある。他方では、生徒、教職員、保護者にとっての精神的負担である。やはり期間が長い、こういった思いがあるが、決して忘れてはならないのが、セーフティーネットである。誰もがしっかりと高校に行けるというセーフティーネットを配慮に入れながら、スリム化する。どこまで簡略にスリム化できるか、これを大きな論点として挙げていくというところがあったかと思う。具体例には、定通分割選抜の二次募集の在り方がもう少しスムーズにいかないかというご意見をいただいた。</p> <p>以上、多様なご意見をいただき、お礼申し上げます。これらも活かしながら、林副会長と、事務局の方とでまとめさせていただき、第3回に向けて資料を作成していきたいと思うので、何卒よろしくお願ひしたい。</p>
--	--

出席者

- | | | |
|-----|-------|--------------------------------|
| 会長 | 池田敏和 | 横浜国立大学教育学部 教授 |
| 副会長 | 林巧樹 | 産業能率大学入試企画部 部長 |
| 委員 | 鎌上真樹 | 神奈川県PTA協議会 副会長 |
| | 廣間亜紀 | 神奈川県立高等学校PTA連合会 副会長 |
| | 石川隆一 | 横浜市教育委員会事務局学校教育企画部 部長 |
| | 大島直樹 | 川崎市教育委員会事務局学校教育部 部長 |
| | 上條茂 | 神奈川県公立中学校長会 会長 |
| | 井坂秀一 | 神奈川県立学校長会議 議長 |
| | 島崎直人 | 神奈川県教職員組合 書記長 |
| | 岩崎長久 | 神奈川県高等学校教職員組合 執行副委員長 |
| | 岡野親 | 神奈川県教育委員会教育局 教育監 |
| | 濱田啓太郎 | 神奈川県教育委員会教育局指導部 部長 |
| | 宮村進一 | 神奈川県教育委員会教育局支援部 部長 |
| | | 併福祉子どもみらい局子どもみらい担当 部長 |
| | 蘇武和成 | 神奈川県教育委員会教育局指導部高校教育課高校教育企画室 室長 |